

2022年度
情報化社会の教育

(第51集)

も く じ

I はじめに..... 2

II 教育実践

1 教育課程編成にあたっての基本的な考え..... 3

2 第72次教育研究愛知県集会の動向..... 3

3 教育課程編成研究の実践報告..... 6

III おわりに..... 10

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員 情報化社会の教育部会

2022年度 教育課程研究委員 (◎部長 ○副部長)

ブロック推薦

名古屋			尾 張			三 河		
氏 名	単組	学 校 名	氏 名	単組	学 校 名	氏 名	単組	学 校 名
丸山和也	名古屋	はとり中	加藤隼也	春日井	出川小	夏目照久	新 城	新城中
大島創平	名古屋	大和小	岩田智文	尾 北	古知野南小	○清水智史	豊 橋	本郷中

第68次～第69次教育研究全国集会レポート提出者

第68次			第69次		
氏 名	単 組	学 校 名	氏 名	単 組	学 校 名
◎小塚俊佑	稲 沢	稲沢東小	○石本敢大	名古屋	桶狭間小

第72次教育研究全国集会レポート提出者… 村手 真樹 (西春・鴨田小)

I はじめに

本部会はこれまで、教科の枠にとらわれず、情報活用能力を育てることを追究してきた。子どもたちは学校や家庭の中で、必要な情報を選択して収集・整理することや、自ら情報を発信し、他者とコミュニケーションを深めることなどを通して、情報活用能力を身につけている。その一方で、多くの子どもたちがインターネット、SNSなどの誤った使い方により、トラブルに巻き込まれている。これらの問題を解決していくために、子どもたちがより確かな情報活用能力を身につけることが必要とされている。子どもたちが、情報メディアを主体的に活用する力を高めることや情報を批判的にとらえ、正しく有効に活用したり、発信する情報に責任をもったりするような情報モラルを身につけること、論理的・創造的に考え、課題を解決していく力を培うことが重要であると考えます。

同時に、教科・領域の目標を達成するために、われわれ教員にはICT機器を有効に活用してわかりやすい授業を行う力も求められている。わかりやすく、学習効果を高める授業を行うために、ICT機器をどう活用したらよいかについても考えていく必要がある。また、プログラミング教育の実施に伴い、論理的思考力や創造性、問題解決能力を育むための手だてについても追究していく必要がある。

情報社会の抱える課題は山積しているが、子どもたちは、それらに向き合い、克服していかなければならない。そのためにもわれわれ教員は、子どもの学ぶ意欲を高め、わかりやすい授業の展開を行うことを教育課程編成の基本的な考え方として、これからも追究していく。

めざす子ども像 ～ 情報活用能力育成のために ～

		情報活用の実践力	情報の科学的な理解	情報社会に参画する態度
小学校	低学年	情報メディアを活用し、自分で感じたことを発表する。	情報メディアにふれ、体験活動を通じてその活用方法を知る。	情報を発信する際のマナーやルールを身につける。
	中学年	情報メディアを活用し、自分の調べたいことについて情報を収集・整理して、発信する。	さまざまな情報メディアの活用方法を、体験活動を通じて身につける。	情報メディアを活用して人とふれあい、情報の受け手を意識する態度を身につける。
	高学年	課題や目的に応じて必要な情報を収集・整理し、受け手にわかりやすく情報を発信する。	さまざまな情報メディアの特性について理解し、適切に活用する。	情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、情報を批判的に読み解く力を身につける。
中学校	情報メディアの特性を理解したうえで、目的に応じた活用方法を選択して自らの課題を解決する。	情報の分析や選択・整理を行い、自らの情報活用を評価・改善する。	情報発信に伴う責任について理解し、社会の一員として情報社会に参画する態度を身につける。	

また、情報活用の実践力については、次のように考えている。

	段 階	内 容
の 情 報 活 用 の 実 践 力	情報の収集	情報メディアを活用し、問題解決のために必要な情報を収集する。
	情報の選択	収集した情報の真偽や価値を判断し、必要な情報を選択する。
	情報の整理・分析	選択した情報に、新たな情報や自分の意見などを加え、整理・分析する。
	情報の発信	整理した情報を、受け手を意識してわかりやすく発信する。

II 教育実践

1 教育課程編成にあたっての基本的な考え

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」について

情報社会に生きる子どもたちは、無数にある情報から必要な情報を選択し整理する能力や、自ら情報を発信し他とのコミュニケーションを深める能力が求められている。

そこで本部会では、以下の4点を基礎・基本と考え、追究したい。

- ・ ICT機器の基本的な操作を行う力
- ・ 目的に応じてさまざまな情報を適切に収集、選択、整理・分析、発信する力
- ・ 情報モラルの必要性や情報に対する責任について考える力
- ・ プログラミング的思考にもとづき、物事を順序立てて考え、問題を解決する力

○「生きる力」をのぼすための重点

身近にあるメディアから情報は途切れることなく流れてくる。その情報に惑わされてしまう子どもたちも多い。情報活用能力を確かなものにするために、情報を主体的、批判的に活用する力をのぼすことが必要である。また、著作権や個人情報の保護、情報の適切で安全な取り扱い方や情報モラルなどを身につけることで、情報社会において、豊かなコミュニケーション能力をのぼしたい。

2 第72次教育研究愛知県集会の動向

(1) 子どもたちに情報モラルを身につけさせ、主体的に情報を活用・共有させていくためには、どのような学習活動をすすめていけばよいかの実践報告

- ① 海部の A 小分会では、情報モラル教育とデジタル・シティズンシップ教育に関する実践が報告された。パスワードやIDの大切さを伝えることや、安全な写真の撮り方を考えさせる取り組みを行い、SNSの疑似体験をすることにより、自分事として考えることができるようになった。各学年で取り組むことで、児童は、情報モラルを守りながらタブレット端末を活用しようとする姿が見られるようになった。
- ② 岡崎の B 小分会では、ICT機器を活用した主体的・協働的な学びを通して、学びを深める子の育成をめざした実践が報告された。チーム学習とマイタブレットを生かした学習が行われた。学習アプリを使うことで、学習ログ分析をして生徒の学習理解度の把握が可能になり、みんなで学び合う学習環境をつくることができた。学習が困難な児童は学習の助けとなり、得意な児童はさらに多角的な見方ができることにつながった。
- ③ 名古屋の C 小分会では、自分なりの最適解を考えることができる児童の育成をめざした実践が報告された。情報化社会で生活する子どもたちは、情報過多の状態である。その情報をどうすれば必要な答え(最適解)にたどり着くことができるのかを体系化し指導した。情報収集をして、まとめ直し、自分の考えを振り返るといった流れでの指導を通して、最適解を求める活動を行うことで、必要な情報(最適解)について考えることができるようになってきた。
- ④ 名古屋の D 小分会では、自分のイメージを基に作品づくりに取り組むことができる児童の育成をめざした実践が報告された。図画工作科でベン図やYチャート、クラゲチャートなどの思考ツールを用いて、イメージをわかりやすく整理することができた。また、自分の作品のアドバイスカードを通して友だちと意見を共有し、自分の作品に生かすことで、よりイメージを明確にして作品づくりを行うことができた。
- ⑤ 質疑応答の概要と助言者のご助言

討論では、情報の収集や整理の仕方や、発達段階に応じた情報教育のあり方、ICT教育を学校全体で行うための取り組み、パスワードやIDの管理の仕方について、意見交換が行われた。

助言者からは、情報活用能力は学習の基盤となる力として位置づけられており、Society5.0の社会において、すべての子どもたちの可能性を引き出すことが大切である。そのために、個別最適な学びや協働的な学びを通して力を育てていく必要があり、探究的な学びを教科横断的に繰り返していくことで情報活用能力も成長していくと助言をいただいた。

(2) プログラミング教育において、論理的思考力を培うためには、どのような学習活動をすすめていけばよいかの実践報告

- ① 豊田のE小分会では、よりよい未来を考えて、主体的に行動する児童の育成をめざした実践が報告された。ICT機器を活用した探究的なESDの学びの場を設定し、活動での気づきを思考ツールで整理することで、必要なプログラムを主体的につくることができた。考えを整理することが苦手な児童も仲間と協働して思考ツールで整理したものを自分の考えにつなぐことができた。
- ② 稲沢のF小分会では、自分の価値ある課題を解決する子どもたちの育成をめざした実践が報告された。ICT機器を積極的に活用し、学習内容と「出会う」場と「比べる」場を工夫した。出会う場では何のために体力を高めたいのかという目的を確認した。比べる場では自分の力を比較する活動を行った。さらに、Formsを活用して内面を見取ることで、授業改善につなげることができた。
- ③ 岡崎のG中分会では、デジタル・シティズンシップを高め、Society5.0をのびやかに生きる子どもの育成をめざした実践が報告された。「岡崎市と言えば？」という発問から「なぜ石材産業が盛んなのか知りたい」との発言があり、それを課題に解決方法を考えた。地域には身近に石像が多々あり、自分事としてとらえて学習をはじめることができた。また、石材産業の現状について考えさせ、石材産業の厳しい現状から今後どうするとよいのかを考えることができた。
- ④ 豊橋のH小分会では、ICT機器を活用することで、自らすすんで考えをまとめ、表現することができる児童の育成をめざした実践の報告があった。特別支援学級におけるタブレット端末の学習について、感染症のため交流学习ができなくなっていたが、Teamsを使うことで交流することができた。気軽に交流活動を行うことができ、交流を通して他校の児童からさまざまな活動をすることができた。学習が苦手な児童もわかりやすいように発表したいと、積極的に考えを深めていけるようになった。

⑤ 質疑応答の概要

討論では、ICT機器を使うときの活動時間の確保や、プログラミング教育をどのように、どれくらい行くとよいのか、子どもたちにプログラムをつくらせるときの注意点、プログラミング教育と日常生活との関連についての意見交換が行われた。

(3) 教科指導の中で、どのようにICT機器を活用することが効果的であるかの実践報告

- ① 西春のI小分会では、主体的に追究しながら、プログラミング的思考力を高められる児童の育成をめざした実践が報告された。自分でゲームをつくることを通して、他者と比較することで、新しい発想に気づき、より深い学びへとつながった。また、アンラグドプログラミングを行い、付箋をもとに文章を書くことで、苦手な児童も手順を考えて書くことができた。朝の準備の手順などもフローチャートでまとめ、条件分岐を行うことで、プログラミング的思考を育むことができた。
- ② 一宮のJ小分会では、主体的に情報を活用し、たくましく生きる子どもの育成をめざ

した実践が報告された。国語で Scratch を活用して、物語の心情曲線を音や色、動きを用いたプログラムをつくり、表現させた。Scratch を用いて表現させる過程で、プログラミング的思考を高めることができた。心情を読み取ることが苦手な児童も、言葉以外の表現方法を身につけたことで、自信をもって登場人物の心情について意見を述べることができた。

- ③ 刈谷の K 小分会では、算数の文章題に親しみをもち、試行錯誤しながら文章題に取り組む児童の育成をめざした実践が報告された。算数の文章題の理解のために Viscuit の利用が提案された。文章をアニメーションとして表現することで、文章の内容を細かく読み取り、正確に表現しようとし、文章の読み取る力が高まった。また、アニメーションにすることで計算の決まりについて児童自ら気付くことができた。

④ 質疑応答の概要

討論では、プログラミング教育を教科で行うときの時間の確保や、プログラミング教材を使用するときの指導の仕方、プログラミング教育とアンブラグドプログラミングを行うときの手順、教科でプログラミング教材を使う意図についての意見交換が行われた。

助言者からは、新学習指導要領をもとに学習の仕方や職員の研修の仕方も変化していくことや、プログラミング的思考を育むためには、時間がかかるがそれをどうやって学習に落とし込んでいくかが大切であること、アプリなどを禁止するのではなく、自分が考えて使っていくデジタル・シティズンシップが大切になってくること、教材を使うときには、なぜそのプログラムをつくるのか、その活動を行うと、これからどんな力がつくのか汎用的に考えられる思考力の育成が重要であるとの助言をいただいた。

自分に適した方法で課題を解決することができる生徒の育成

(1) はじめに

文部科学省がGIGAスクール構想を提唱し、本校でも一人一台の学習者用タブレット端末を活用した授業が行われ、生徒は個別最適化された学習や協働学習に取り組んでいる。Society5.0の時代に生きる生徒にとって、タブレット端末は日常のものになっている。学校生活でも徐々にタブレット端末の活用場面が増えている。一人一台のタブレット端末をもつことによって、一人ひとりの反応や習熟度を把握することができる。また、一人ひとりの考えをリアルタイムで共有したり、生徒どうしの意見交換をしたりすることができ、生徒の学びの可能性が広がっている。

一人一台のタブレット端末をもつことによる課題もある。生徒がタブレット端末で情報を収集したり、自分の考えを発信したりする場面が増えることにより、情報モラル教育を欠かすことができなくなっている。インターネット上の情報の真偽を確かめることや考えを発信する際に気をつけなければならないことを指導し、トラブルを未然に防ぐことが必要である。

今年度、私は中学1年生の技術・家庭科（技術分野）を担当している。学習指導にタブレット端末を活用して、生徒個人に合わせた学習や協働学習に取り組ませたいと考え、本研究を進めることにした。

(2) 生徒の実態

本校の生徒は、毎日の学習に真剣に取り組んでいるがなかなか学習内容が定着しない。授業の時間に「わかった。」「できた。」と言っているが、次時の学習ではその内容を忘れてしまうことがよくある。

また、私が担当している技術・家庭科（技術分野）の学習では、木材のよさを生かしたものづくりを行うが、その際、「社会からの要求」「経済性」「環境への負荷」「安全性」という「技術の見方・考え方」を意識させる必要がある。「社会からの要求」「安全性」は意識できるものの、それ以外の視点は意識できない生徒が多い。

(3) 研究の手だて

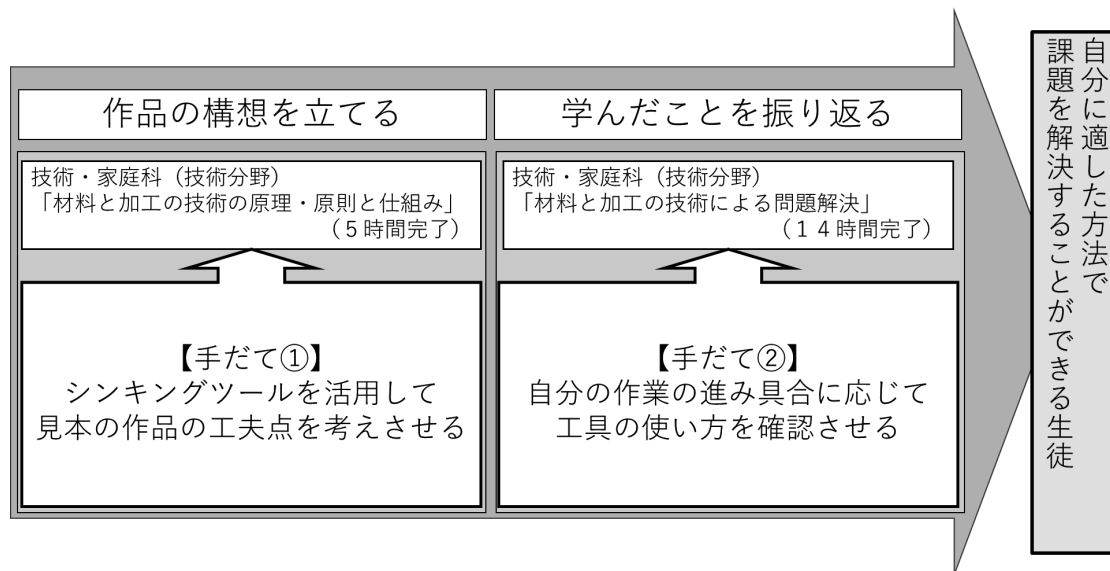
① 作品の構想を立てることができるようにするために

「技術の見方・考え方」を意識することができない生徒がいる実態をふまえ、シンキングツールを用いる。見本の作品の工夫点を考えさせ4視点に分類させ、協働学習支援ソフトの提出箱を用いて意見交流を行う。他の生徒が提出したカードを見せることで、新たな考えに気付くことができるようにする。その後、自分の作品に取り入れられそうな工夫を選択させ、自分の作品の構想を立てさせる。

② 学んだことを振り返ることができるようにするために

木材のよさを生かしたものづくりの製作工程は「けがき」「切断」「部品加工」「組み立て」「仕上げ」である。製作に取り組む際に、それぞれの工程における工具の使い方を指導する。しかし、実際に工具を使う場面になるとポイントを忘れてしまうことがある。そこで、タブレット端末の協働学習支援ソフト（ロイロノート・スクール）を活用していつでもどこでも、個別に工具の使い方を振り返ることができるようにする。自分が作業する前に工具の使い方を振り返り、安全に正確に工具を使うことができるようにする。

(4) 研究の流れ（対象：中学1年生）



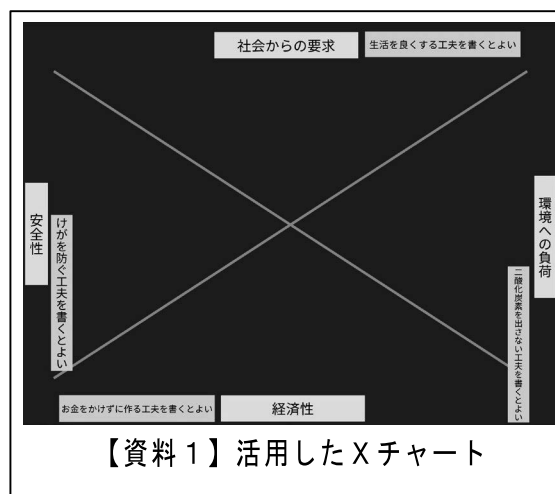
(5) 研究の内容

① 第一次授業実践

「材料と加工の技術の原理・原則と仕組み」（5時間完了）

初めに、教師が製作した作品の工夫点を考えさせるために、見本の作品を見せ、教師が工夫したところを考えさせた。「技術の見方・考え方」の4視点を意識させるために、シンキングツールのXチャートを活用して、4視点に分類させた。【資料1】

生徒は、教師が製作した見本の作品について、工夫した点を記入したカードを貼り付けていった。その際、「社会からの要求」「環境への負荷」「経済性」「安全性」の4視点で分類して貼り付けた。分類したものを、すべての生徒が見ることができる提出箱に提出させた。

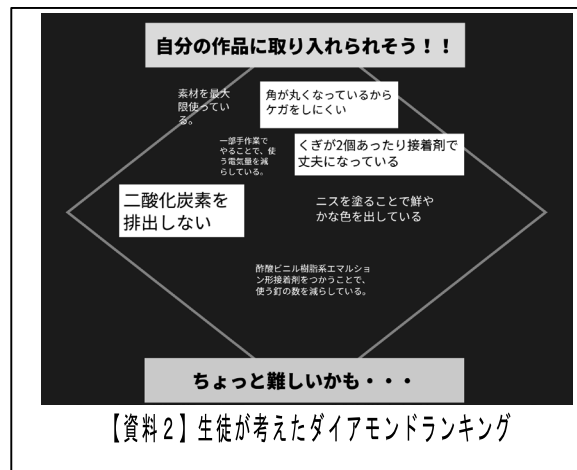


提出させる前に、情報モラルの指導も必要であると考え、「提出箱は誰でも見ることができるため、他の人が不愉快に思うような内容を書き込まないようにする」といった約束事を伝えた。

「技術の見方・考え方」の4視点のうち、すべての視点についての工夫点を記入することができなかつた生徒が多くいた。そこで、自分が記入することができなかつた視点を中心に見てXチャートを完成させるように促した。他の生徒が作ったXチャートを見て意見を共有し合うことで、新たな考えに気付くことができた生徒が多くいた。

次に、教師が工夫した点をこれからの自分の作品づくりに生かすことができるようにするために、シンキングツールのダイヤモンドランキングを活用した。自分が作成したXチャートから、これから製作する自分の作品に生かせそうであると思う工夫点をダイヤモンドランキングの上のほうに配置させた。また、よい工夫だけど自分の作品には生かすことができないと思う工夫点はダイヤモンドランキングの下のほうに配置させた。

生徒は、自分がつくったXチャートだけでなく、他の生徒がつくったXチャートからも自分の作品に生かせそうな工夫点をダイヤモンドランキングに貼り付けた。4視点に分けたXチャートからダイヤモンドランキングに貼り付けさせることで、「技術の見方・考え方」を意識して自分の作品の工夫点を考えることができた。【資料2】初めは、「安全性」や「社会からの要求」のみの記入しかできなかった生徒も、くぎの数や素材を最大限に使っているかどうかなど、他の視点で考えた工夫点についても、ダイヤモンドランキングに貼り付けることができていた。



② 第一次授業実践の成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- Xチャートを作成した後に、他の生徒と考えを共有させることで生徒は新たな考えに気付くことができた。
- 「技術の見方・考え方」の4視点で考えた工夫点をダイヤモンドランキングに貼り付けさせることで、自分の作品に取り入れられそうな工夫点を考えることができ、今後製作する作品にどのような工夫を施すかを考えることができた。
- 「技術の見方・考え方」により注目させるために、カードの色を視点ごとに分けるなどの工夫が必要であった。
- 週に1時間の授業なので、学んだことや考えたことを忘れてしまうことがある。いつでも振り返り、製作の際は常に意識できるような手だてが必要である。

③ 第二次授業実践

「材料と加工の技術による問題解決」(14時間完了)

第一次授業実践で考えた工夫を取り入れた作品づくりを行った。木材のよさを生かして自分の生活の役に立つ作品を製作させた。作品製作の手順は「けがき」「切断」「部品加工」「組み立て」「仕上げ」である。工程ごとに使用する工具等は以下の通りである。【資料3】これらの工具は、正しく使用しないとけがや事故につながる危険がある。また、一度指導しただけでは正しい使用方法を忘れてしまうこともある。正しい使用方法を定着させるためにタブレット端末を活用することにした。

工程	けがき	切断	部品加工	組み立て	仕上げ
工具	さしがね	両刃のこぎり	かな または こぐち削り機	げんのう	研磨紙 はけ

【資料3】使用する主な工具

これらの工具の使用方法を全体で指導した。実際に教師が工具の使い方のポイントを押さえながら工具の使用方法を伝えた。しかし、それだけでは定着しないので、生徒がいつでもポイントを確認することができるようにするために工具の使い方をまとめたカードをタブレット端末上で配布した。【資料4】

このカードを生徒に配付しておくことで、工具の使い方がわからなくなったときにいつでも見直すことができる。また、「自分が気付いたコツ」という欄には、教師が伝えたポイントや自分が気付いたことを書くことができたようにした。

材料となる木材を配布して、寸法を測って線を引く「けがき」の作業の際はさしがねの使い方の動画を見て、さしがねの使い方を振り返る生徒がいた。また、作業が早く終わってしまった生徒は、切断の作業に移るために両刃のこぎりの使い方の動画を見て、ポイントを確認した上で他の生徒よりも先に切断の作業に入る生徒もいた。あらかじめ、工具の使い方をまとめたカードを配っておくことで、自分の作業の進度に合わせて製作に取り組むことができた。

	けがき	切断	部品加工	組み立て	仕上げ
工具等	さしがね	両刃のこぎり	かんな・やすり	げんのう	研磨紙
動画			こぎり削り機		はけ
ポイント					
自分が気付いたコツ					

【資料4】工具の使い方をまとめたカード

部品の寸法を、目的の大きさに整える「部品加工」の工程では、かんなを用いて手作業で行うか、こぐち削り機を用いて機械で行うかを考えさせた。そのために機械と手作業のメリットとデメリットを考えさせた。それぞれのメリットとデメリットを記入することができるカードを配布した。生徒は、「けがの危険」「二酸化炭素の排出」「製作の効率」の三つの観点から手作業と機械について考えた。これは、「技術の見方・考え方」の「環境への負荷」や「経済性」についても考えることができるようにするためである。考えることが難しい生徒のために、「考えるポイント」という欄を設け、考えるための手がかりも与えた。

	けがの危険	二酸化炭素の排出	製作の効率
手作業	【危険度2】理由:自分で力の制御ができたり、自分の思う方向に切れたりする。でも、思わぬこと事故が起きてけがをする可能性もあるので2にしました。	【地球への影響2】理由:作業するときには二酸化炭素を排出しないが、製造(金属加工)するときには少し二酸化炭素が排出してしまう。	【効率1】人によって力加減やスピードは違うが機械と比べると基本的に効率が非常に悪い。
機械	【危険度4】理由:一回起動したら電源を落とす限り動き続けてしまうので危ない。指が一回でも触れたら大けがになってしまうから。	【地球への影響4】理由:まず作業するときに電気を消費して、二酸化炭素を排出してしまし、機械を製造するときにも二酸化炭素を排出してしまう。	【効率4】理由:刃物を高速に回しているのですぐに素材を切断できるので効率が非常にいいです。
考えるポイント	それぞれで、けがの危険があるかどうかを考える。製作中だけでなく、作った作品を使用しているときのこと考える。	二酸化炭素を排出する場面としては、電気を使用するときと物を燃やすときにどのようなときに電気を使ったり、物を燃やしたりするか考える。	時間がかかるのはどちらか、効率的に作業を進めることができるのはどちらかを考える。

【資料5】生徒が記入したカード

生徒は三つの観点について、4段階の度数とともに、その度数にした理由をカードに書き込んだ【資料5】。観点と考えるための手がかりをもとに、手作業と機械について考えを記入することができた。

④ 第二次授業実践の成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 工具の使い方をまとめたカードをあらかじめ配っておくことで、生徒はそれを見て工具の使い方を振り返ったり予習したりして、自分の進度に合わせて作業を進めることができた。
- 「けがの危険」「二酸化炭素の排出」「製作の効率」の観点で手作業と機械について考えさせたが、経済性に関して書くことができない生徒が多く、「技術の見方・考え方」の4視点を意識することができなかつた。考えるための観点を再考する必要がある。

(6) おわりに

タブレット端末の協働学習支援ソフトを活用し、他の生徒と考えを共有することで、生徒は新たな考えに気付き、「技術の見方・考え方」を働かせて、作品の構想を立てることができた。また、シンキングツールを使って工夫点を分類することで、考えを整理することができた。今後もタブレット端末を活用して考えを共有させたり、個別最適化された学習に取り組ませたりして、個々の力を高めていきたい。

Ⅲ おわりに

令和元年12月。文部科学大臣メッセージとして「子ども一人ひとりに個別最適化され、創造性を育むICT環境の実現にむけて」が発表された。また同時に、文部科学大臣を本部長とする「GIGAスクール実現推進本部」が設置され、児童一人一台端末の活用が決まった。子どもたちが端末上の情報を読み取り、学習成果を画面上でまとめることが、「令和の学びのスタンダード」になり、これまで以上に大量の情報を取り扱うことになった。

さらに、これと同時に、インターネットの世界は無限の広がりを見せ、最近はSNSを通じてコミュニケーションをとる大人たちも増えてきている。大人ばかりではなく、多くの子どもたちもSNSやオンラインゲームなどに夢中になり、情報端末と過ごす時間も増加している。このようなテクノロジーが目まぐるしく変化して、予想もできない未来でも活躍していく子どもたちを育ていく立場にある私たちは、新しい時代に対応できる力を身につけさせなければならない。

本部会では、情報社会の中での子どもたちの実態を背景に、「今、子どもたちに必要な力とは何か」を明らかにしてきた。その上で教員がICT機器を活用したわかりやすい授業の工夫や情報活用の実践力を育成するための学習活動、そうした活動の中での情報モラルの指導法や情報メディアを主体的、批判的に読み解く力の育成方法を追究してきた。また、プログラミング教育が実施されるに伴い、その指導方法についても研究をすすめている。

プログラミング教育では、プログラミング教材を使ってゲーム感覚で学ぶ実践や、日常生活に関連付けて、物事を順序立てて考えさせる実践等のプログラミング教育が積極的にすすめられるようになってきた。また、ICT機器を活用した探究的な学びの場を設定し、活動での気づきをさまざまな思考ツールを用いて情報を整理することに重点を置く実践も多く見られるようになってきた。プログラミング的思考を高めるためには、小中高を見通した教育活動を進めていくことが重要であることや、継続的で発展的なプログラミング学習を進めることでプログラミング的思考を育ていくことの重要性などを共通理解していく必要があると考える。

情報モラルの育成については、インターネットのよき使い手を育成する実践や、発達段階に応じた情報モラルの実践を通して、SNSを適切に利用できる子どもたちを育成することをめざしている。現在注目を集めつつあるデジタル・シティズンシップにもとづいた指導を心掛けることや、インターネットの使用を前提とし、子どもたちが主体となって適切な使用方法を決めていくことの重要性などを共通理解していく必要があると考える。

ICT機器の効果的な活用方法については、タブレット上でおすすめの本を紹介する動画を作成する実践や、自分の考えを明確にして相手に伝える実践などを通して研究を進めている。成果としてICT機器を活用することで、子どもたちが抱える問題を視覚化・共有化することができ、主体的・対話的な学びにつなげることができた。また、一つのゴールにむかって協働学習を進めることは、デジタル・シティズンシップの考え方にも一致すること実感することができた。今後もさらなるICT機器の効果的な活用方法を研究していく必要があると考える。

今後、情報化社会の教育部会における、教育課程研究の成果が、各職場で生かされ、愛知の教育活動がさらに発展していくことを願ってやまない。